

ここ東北は、東日本大震災より前から人口減少や高齢化が着々と進んでおり、これまでの建築では立ち行かないという危機感を抱き続けてきた地域である。私自身、震災の半年前に東京から仙台に拠点を移し、教育研究活動に関わり始めた時、当時出会った学生たちが既に、「いかに美しく生まれ故郷の集落を消滅させていくか」という課題や「長いスパンをかけて核燃料再処理エリアを森林に遷移させる」という課題に向き合っていたことに、軽い衝撃を覚えた。東北では、随分前から「新たに建てる必要があるか」と問われ続けており、それに対する提案については、若い学生の方が躊躇なく際立っていたように思う。

「解築学」においては、近代以降の純粋な美しさや効率だけを追い求めることはできず、性能や寸法にある程度のいい加減さ、ゆるさが求められる。また、モノだけでなく人や自然環境も含めた様々な次元のネットワークが介入できる許容力の高さも必要である。

今回の審査では、応募のあった12点の提案について、審査員の専門性をもって単に評価するだけではなく、「解築学」について理解半ばであるということを前提として議論を進めていった。最終的には、多層のネットワークが介入していく余地が実現できているだけでなく、空間としての魅力や建築（時には建築だったもの）がもつ力が感じられ、いままでにない豊かさや価値をつくり出していると思われる4作品が選定された。

さまざまなモノ/コトの循環の中に場をつくり出すことが「解築」であると仮定すると、選定した敷地の状況によって網の目の形状が異なることから、自ずとそこに生成していく建築（だったもの）のあり方、提案するもののスケールや課題として捉える範囲、手法も多様なものとなる。これらの提案を通して改めて、「解築」そのものと「解築」から拡張していく「建築の可能性」について理解を深められればと思う。